

世界の秘境巡り 第7話

クウェート (Kuwait)

檜原勇多賀 (S 3 7 卒)

1. 天国と地獄

インドを逃げ出し、バーレーンを経て、クウェート国際空港に着いたのは、もう夜の6時を過ぎていた。そこはインドと同じように暑く、しかもインドとは違ってアルコール類は飲めないが、インドと比べればまさに天国であった。地獄から天国へやって来た気分であった。

クウェートはペルシャ湾の北西岸にある国で、面積は17,800平方キロメートル、四国とほぼ同じ大きさの小さな国である。人口は、1980年で140万人、人口構成は、クウェート人が40%、残りの60%のノンクウェートのうち90%がパレスチナ人などのアラブ、5%がインド人とパキスタン人、4%がイラン人、そして1%の英米人である。

クウェートは、東はペルシャ湾に面し、北と西をイラクに囲まれ、南はサウジアラビアに接する。国土の殆どは土漠地帯で、人口はクウェート市に集中する。



2. ホテル

クウェート国際空港は、クウェート市の南15キロメートルの砂漠の中にある。空港は小ぢんまりと小奇麗で明るく、中近東には珍しく感じの良い空港である。空港から高速道路を飛ばして、ものの10分でクウェート市に着く。

市の中央やや東寄りにあるクウェート・インターナショナル・ホテルに入る。ク

ウェート市にはこの他に、ハイアット・リージェンシー、シェラトン、ヒルトンなどのアメリカ系のホテルが数多くある。



遅い時間に着いたので、ホテルの中の日本料理屋で夕食を摂る。私は未だ日本食が恋しくなるまでには至っていなかったが、私を歓迎してくれた人たちが日本食にかなり飢えていたのと、クウェートの料理は口に合わないのが和食を選んだ理由である。

りんごジュースでの乾杯は戴けないが、魚介類は思ったより新鮮で美味しい。鮪の刺身などは、日本酒が無いのが残念なくらいだ。

食事が終わってロビーの方に引き返して来ると、何やら賑やかな音楽が聞こえてくる。 <なんだらう？> と思って音楽の聞こえてくる方へ行ってみると、大きなホールの中から、大勢の人が賑やかな音楽に合わせてステップを踏みながらゆっくりこちらに向かってやって来る。音楽は10人前後の楽士が、管楽器と打楽器を使って奏でているもので、軽快なリズムと明るいメロディの中に、アラビックの薫りがする。音楽に合わせてステップを踏んでいる人の群れの中程に、ひときわ目立つ衣装をまとった一組のカップルがいる。どうやら、結婚式の披露宴が終わって、新郎新婦を送り出す場面のようなのだ。幸せそうな新郎新婦のはにかみと笑顔、まわりを取り巻く人達の陽気な仕草と嬌声、いずこも同じ雰囲気である。しかしよく見ると、新郎と楽士たちを除いて、あとの人達はすべて女性であることに気が付いた。クウェートでは、結婚披露宴は、男性と女性と別々に行われるのだそうである。

3. 高速道路

1930年代にクウェート南部に豊富な石油の埋蔵が発見され、以来、アメリカとイギリスの資本の手で発掘され、現在中近東最大の石油産出国の一つとして知られている。このため、クウェートにはアメリカの近代技術がどんどん取り入れられ、アメリカ的な近代国家の様相を随所に見ることが出来る。



高速道路もその一つである。荒涼とした土漠の中を、幅広い立派な高速道路が延々

と続いている。そして、その高速道路を突っ走っているのは、殆どフルサイズのアメリカーである。しかし、このように近代化されたクウェートにも悩みが無いわけではない。今までラクダしか乗り物を知らなかったクウェート人にいきなり高速道路と車を与えられたものだから、その与えられた玩具に夢中になり、交通事故が頻発している。

4. スーパーマーケット

出発までに時間があつたので、スルタン・センターというスーパーマーケットを覗いて見ることにした。裏の駐車場に車を止めて中に入ると、いきなり新鮮な果物の芳香が嗅覚を刺激した。見ると、入口にありとあらゆる果物が山のように積まれている。手に取って見ると、いずれも艶々として瑞々しく美味しそうである。クウェートでは果物は採れないから、これらはすべて輸入品である。その数の豊富さと種類の多さに圧倒された。次に、左手奥に魚屋がある。魚の種類も豊富である。魚屋の後ろの壁に、ペルシャ湾で捕れる魚の種類がスケッチ入りで説明されている。ほとんどは知らない魚だが、鮪も捕れることは先日の日本料理屋が証明してくれている。店の中央に、さまざまの乾物が並べられている。驚いたことに、日本食コーナーがあつて、インスタント・ラーメンは勿論のこと、スルメイカや餅まで置いてある。二階はちょっとしたデパートになっていて、殆どの日用品はここで手に入る。

5. 禁酒

このように近代化されたクウェートで、ただ一つ不満なのは禁酒である。これであと酒が大っぴらに飲めれば、文句なしの天国である。嬉しいことに、この禁酒も最近は次第に緩和されつつあると聞く。次に訪れるときには、ペルシャ湾の鮪で日本酒が飲めるようになっていて欲しいものだ。

友達からの手紙

S.41年卒 久保愛三 (公益財団法人応用科学研究所)

京機短信の原稿が不足しています。このままでは継続出版に支障をきたすので、勝手ながら、
去年の9月頃の雑文ですが、穴埋めにさせていただきます。

若いころ、ドイツでぶらぶらと一緒に青春を楽しんでいた友人の田中さんから以下のようなメールが届きました。

久保愛三様

ドイツの学術雑誌 (HLH、Gi) を読んでいたら、最近英語がやたらとドイツ語に浸入している事に気が付きました。小生のブログ (<http://tatsut.org>) の表紙の下にある”つれづれに思う事”をクリックしていただくと日記が現れます。9月11日の日記^{注1}をお読み頂き、ご意見を頂けると幸いです。小生が、勘違いをしているのかもしれませんが。もっとも以前 ”リストランテの夜” というイタリア映画を見ました。イタリア料理の有名シェフが米国の田舎に行き純粋のイタリア料理店を開いたというものです。地元民からは不評で、他の素人のイタリア人がやっているイタリア料理屋は適当に米国風アレンジし、こちらは商売繁盛したそうです。純粋のイタリア料理店主は店をたたんで、すごすごイタリアへ戻ったというストーリーでした。明日、空調学会大会出席のため鹿児島へ参ります。14日朝一番で誰も聞いていない会場で寂しく発表します。残暑厳しき折、ご自愛ください。

注12016年9月11日 (日) 田中辰明ブログ*****

現役の頃、論文をよく投稿させていただいたドイツのHLH誌、Gi誌の昨年のバックナンバーを今年夏の暑い頃に読み、気になったところを書き留めておいた。昔よく執筆されていた著者も全く代わっている。したがって書き方も変わってしまった。世界語になるつつある英語がドイツ語を犯している。今から100年も前にショーペンハウアは、ドイツ語は英語やフランス語に比べて高等で素晴らしい言語であるにもかかわらず、売らんかなの三文文士により破壊さ

れている、嘆かわしいと書いている。気になったタイトルを抽出してみた。
HLH誌2015年1月号” Run auf Regenwasser in der Industrie”はLaufen auf Regenwasser in der Industrieでよかったですのではないかと同誌2月号” Die neue Oekodesign-Richtlinie der EU”は Die neue Oekoplanung-Richtlinie der EUでよかったですのではないかと同じく同誌2月号” Rechenzentrumspezialist baut Cooling Business aus”は”Rechenzentrum spezialist baut Kuelgeschaeft aus”で良かったであろう。同誌7月号” Lech Check”は” Leck Ueberwachung”で良いであろう。同誌7月号” Technische Monitoring”は ”Technische Ueberwachung”で良いだろう。同誌10月号の” Shoppen in Wohlfuelatmosphaere”は” Einkauf in Wohlfuelatmosphaere”で良いであろう。同誌10月号の” Immer cool bleiben”は” Immer kuel bleibenで良いであろう。

このように英語帝国主義が世界の言葉を蝕みつつある。ショーペンハウアもフランクフルトの地下で嘆いているに違いない。

これを読んでいると現在の日本ならびに世界について色々な思いが頭を巡ります。先日、同じ仕事仲間の友人が「久保さん、そんな好き勝手なことを言っていたらその内、刺されるで。そやけど、どうせ近いうちに死ぬんやから、それが一寸早くなっただって、どうでもええやな。そやから、年寄ると怖いもん無しになって、いじわる爺さんになるんやね。」とのたまいました。その通りだと思いません、とすることで、頭の中を巡っている思い、田中さんへの返信をご紹介します。

////////////////////////////////////

田中さん

ご無沙汰しています。お変わりなく、ご活躍のご様子、大慶の至りです。私も、いまだにドタバタしています。人間が病気になるように機械のトラブルもなくならないのに、それに対処する医者としての機械技術者が不足してきているため

しょう。私個人の実入りの点からは良い状況です。だけど、国にとっては不幸な状況ですね。

人間は間違いを犯し、病気になって死ぬのと同様に、機械も劣化して潰れ、一度出来たと思ったことも時間が経つと忘れ去られ、無かったのと同じことになると思う、昔から宗教がいつも言ってきた、あるいは賢人がいつも認識していた、「確たるものはなにも無い」という単純な真実が、この頃はすべて忘れられているようです。まあ、これが人間なのでしょう。地球上に人間が付けた痕跡なんて、宇宙から見れば、鏡餅に生えたカビがようなものなのに。今の人間は思い上がっています。

ローマ時代にラテン語が文明世界の共通語であったように、この頃は英語が世界の共通語になったとして、アメリカが世界を牛耳る構造を作っています。アメリカの動きを見ていると、昔、ローマがやったやり方をそのままコピーしてやっているようで、面白いです。ローマ時代には学問教育の分野の言葉はギリシャ語でしたが、今の世界でそれに対応するような言語に英語がなってきたのかも知りません。力を失ってきたヨーロッパには、歴史に学んでそのような立場の言葉に、インテリジェンスの証として、ヨーロッパ語を採用させようとする動きがあっても良いかと思うのですが、それはありません。

アメリカは、第一次世界大戦、第二次世界大戦を勝ち抜き、戦場になったヨーロッパの連合国を助ける名目で戦後の世界経済で優位に立ちまわれる種々の契約を結び、現在の世界経済の基本構造を作りました。そして、全ての言語の中にアメリカ語が大きく取りいれられるのは、アメリカを中心として世界を動かして行くことの出来たアメリカの経済力・驕りが言語の領域でもたらした状況でしょう。アメリカ人は当然、現在、この状況から多くの分け前にあずかっている世界の人々は、英語以外は情報を伝える言葉ではないと思っています。古今東西、様々な文化が育んだ心までも英語だけで表現できると思っている人もかなりいるのかもしれない。日本でも Geistwissenschaft なんて言葉は今や大学にも存在しません。人間の興味の対象に精神的なものが無くなってしまったのです。英語でない

言語表現は、認識不可能と人に思わせています。また、大学もインパクトファクターなるもので、格付けがされています。英語論文の掲載で大学のランクが英語圏で決められているのです^[注2]。その結果、英語圏の3文大学がドイツの一流大学よりも高く評価され、そのランクが既成事実化されて行くこともあるようです。もっともこれは新しい環境に順応する社会の新陳代謝の動きであり、良しとする点があるものかも知れません。

上述の話をもう少し掘り下げて考えると、これは一神教のなせる業で、一神教の犯しているもっとも大きな罪です。「価値判断の基準は統一されたものでなければならない。自分の頭で考え、物事を判断することは異端で、火あぶりの対象である。」として、一神教は経営されています。このスキームを定着させるために頭の良い坊主は、コンスタンチヌス大帝が全ローマ帝国をローマ教皇に寄進し、全ての王や皇帝の上にローマ教皇が立つと言う契約がなされていると言う文書を偽造し、千年以上もの長きにわたり、中世の世界を通じて人々を洗脳してきました。長い時間が経つと、その経緯でどんな悪いことがなされていようと、それは次第に忘れ去られ、結果だけが残ります。

異端heresyとはギリシャ語の*hairesis* (*αἵρεσις*, *haireomai*) から来ており、選択するchooseの意味ですが、これを悪として存在すら許さないとするのは、ニケアの宗教会議に勝ったローマ教会が自分の宗派の権益を守るために敵対者を排除する必要から考え出した概念です。神は言う「私を疑ってはならない」と。しかしそれは神の代弁者を騙る坊主の頭で考え出されたことが言われているのです。特定の神に選ばれた人には、神は都合の良いように話をつけてくれるのです。物事の存在の多様性を認めない、価値判断の基準を坊主の頭の狭い領域での理解のみに限定し、それ以外の価値判断基準を排除する、あるいは、客観的に価値判断基準を眺めることさえできないのでそれを拒否すると言う、基本的なスキームが生み出されます。

ピューリタンの国アメリカは変な国で、現在でもその巨大キリスト教会が民衆に影響を与える状況などは、世界の他の国と少し違うところがあります。宗教国家アメリカは異端は排除すると言う一神教のドグマの上で、善を行っているつもりで行

動しています。世界を破滅に導きかねない大きな問題を内包しながらも、現在、化け物化した資本主義で世界が統制され、それに刃向えば即座に亡き者にされる経済構造が世界のすべてを支配しています。戦勝国が持つパワーバランスの結果です。人間は生きて行く上で現時点の豊かさや快樂が大切なので、この状況に世界中の人々が従っているのです。日本国の経営も、上述の日本ならびに世界の大学の状況もそうです。ドイツでもフランスでも、英語の利用パーセントが異常に増えてきているのは、このような経済構造がもたらした結果なのでしょう。したがって、心配されておられるドイツ語の問題は、この経済構造が続く限り無くならないと思います。

私が一番恐ろしいことと思うのは、この状態が進行していった究極がどうなるかです。昔、地球が人間の行動範囲に比べて大きかった時には、たとえローマ帝国の最盛期でも、地球上の離れた所には色々な異なる文化圏が存在していました。したがって、一つの文化圏が消滅しても、他の文化圏が次には栄えると言う、地球規模では人類生存の永続性があった訳です。現在のように、人間の行動範囲が大きくなり、地球の大きさが小さくなったこの世界で英語が世界の唯一の言葉になることは、他の文化圏が死んでしまい、地球上に英語以外の文化圏が存在しなくなることを意味します。この状態で、英語文化圏が崩壊すると他の文化圏はすでにありませんから、地球上に文化圏が全てなくなることになります。

このことから興味のあるのは、アメリカが今後どのように変貌して行くかです。人口の数パーセントが国の富の90%以上をも保有するのは、現在の民主主義社会では明らかに異常ですが、エジプト、ギリシャ、ローマなど、歴史を作った国々の支配階級はそれ以上の富を独占していました。時代が変わって現在に至り民主主義国家になったと言っても、この点ではアメリカは富の配分の異常性を引き継いでいます。そして、この富の偏り状態をさらに著しくして行くのが上述の化け物化した資本主義の経済構造です。現在の支配階級の富は大昔の支配階級の富の配分に近づいています。当然ながら民主主義なんて似非の仮面です。国のトップに誰がなる

うと、この経済構造が世界を支配している限りは、状況に変化をもたらすことはできません。しかし、イギリスのEU離脱国民投票やアメリカの大統領選挙の時の poor white の挙動にもその兆候が見られるように、いずれは人間populiの不平不満が爆発して、革命のようなことが起こるでしょう。ポルポト革命のようなやつです。悲惨な状況になるでしょう。そして英語文化圏は死に、その時、他の文化圏はすでに存在しませんから、地球上の文明は消滅します。まあ、その後何千年か経てば、また、新しい文明が起こってくるかもしれませんが、それまでは原始生活をしていけばいいのかもしれませんが。

私の年代はそのようなことの起こる以前に死んでしまっていますから、この状況に曝される危険はありません。しかし、この状況を作ったのは私たちの世代で、「先々は知らないよ」と死んで行くのですから、無責任なものです。

***** 注-2 *****

英国の教育専門誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）」は21日、今年の世界大学ランキングを発表した。日本から上位200校に入ったのは昨年同様、東京大（39位）と京都大（91位）の2校だけで、国内トップの東大もアジアでは3位から4位に後退した。アジアの首位は2年連続でシンガポール国立大（24位）で、中国の北京大（29位）と精華大（35位）が2位と3位だった。昨年の東大と京大はそれぞれ全体の43位と88位だった。ランキングは各大学の教育環境や研究への評価、論文の引用数など5分野13指標の評価で決められる。同誌のフィル・ベイティ編集長は、日本の大学の不振の背景を「資金不足で、概して海外の才能を取り込むことがうまくない」などと分析。アジアの大学が存在感を増す中で「日本は後れを取らないようにしなければならない」と指摘した。ランキング全体では昨年2位だったオックスフォード大（英国）が、昨年まで5年連続で首位だったカリフォルニア工科大（米国）を抜き、2004年に始まったTHEランキングで初の首位を獲得。上位9校のうち8校を米英の大学が占めた。（ロンドン＝渡辺志帆、出典を忘れたが、どこかのニュース）

英国の教育誌が発表する世界大学ランキングで、国内筆頭の東京大が順位を落とし、去年のアジア首位から3位になった。ほかの国内組で200位以内は、京都大のみ。2年前、政府が「10年後にランキング100位以内に10校」という目標を掲げたのに、どうして？

教育誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）がランキングを公表した翌日の今月2日。当時の下村博文文科相は記者会見で「わが国の大学は国際面の評価が低い。それだけ魅力が無い。対応ができていない」と厳しく指摘した。世界88位の京大の担当者は「国際化についての評価は低い。努力したい」などと話し、43位の東大広報室は「コメントは控えたい」と言葉少なだった。国は、13年の「日本再興戦略」で大学ランキング上位校の増加を政策目標とし、「グローバル人材」の育成を進めようとしている。目玉事業が、留学生増加や海外連携を進める東大など37校に予算を充てる「スーパーグローバル大学」。ほかに、外国人教員を雇いやすくするなどの対策を促すために学長権限を強める法改正や教育内容の明確化を各大学に迫る制度変更などで「達成を目指している」と文部科学省は説明する。（出典を忘れたが、どこかのニュース）

Est res publica res populi 国家とは「国民のもの」のことである（キケロー）

<阪神甲子園球場での球「宴」プラン> の開催報告

平成29年1月14日(土)10時から阪神甲子園球場において大阪あそ歩特別企画を行いました。当日は寒い一日でしたが、快晴に恵まれ、会員、ご家族、ご友人合計24名の参加でした。

甲子園歴史館では阪神電鉄の計画した甲子園エリアの開発計画、甲子園球場の建設段階からの歴史、高校野球の名勝負で実際に使われた道具などの展示や阪神タイガース球団の歴史、名勝負の記録映像などを見学しました。甲子園球場見学では3塁側ダッグアウトや室内練習場、ロッカールームなどを見せてもらいましたが、当日運良く7~8年に一度行われているグラウンドの芝の張替えが行われており、その様子を見ることができました。また副球場長の浅沼氏より甲子園球場にまつわる歴史やエピソードなどの特別講演をしていただきました。

見学会後は球場内のプレミアムランジで企画をお世話いただいた矢辺氏（昭和57年卒）の乾杯で懇親会を兼ねたランチを開始し、お開きは長年のタイガースファンでおられる中谷氏（昭和37年卒）にお願いし楽しい一日を過ごしました。

